

エッセイ 楽しい“虫音楽”の世界（その11 蜘蛛の音楽）

昆虫芸術研究家

柏田 雄三（かしわだ ゆうぞう）

「虫音楽」のタイトルでありながら蜘蛛の曲を取り上げる。虫偏が付くことからわかるように蜘蛛、蛙、蛇等は蝮（まむし）の象形文字「虫」の仲間である。芥川龍之介の小説「蜘蛛の糸」でお釈迦様が極楽から降ろした蜘蛛の糸は地獄の底から韃陀（かんだ）多（た）を吊るした。ある雑誌の奈良県立医科大学大崎茂芳教授の「クモの糸の秘密」には悪戦苦闘し蜘蛛の糸で50cmのヴァイオリン弦を作ったことが書かれていて、動画サイトでその弦を使った演奏を聴くこともできた。

芥川龍之介の息である作曲家芥川也寸志（1925～1989）の「舞踏組曲『蜘蛛の糸』」は小説「蜘蛛の糸」発表の50年後にあたる1968年に初演された。CDの解説書には曲の各部分に小説のストーリーが記され音楽の鑑賞を助けている。時代を下って木下牧子（1956～）の「音楽物語『蜘蛛の糸』」は朗読、ソプラノ、クラリネットとピアノのために書かれた曲で、全13章の一部を動画サイトで聴くことができた。J-POPでは中島美嘉とMr.Childrenの「蜘蛛の糸」の糸は人の心をつなぎ、筋肉少女帯の「蜘蛛の糸」の糸は韃陀（かんだ）多（た）を思わせる。

「蜘蛛の糸」に限らずクモの曲は数多い。文部省唱歌「蛙と蜘蛛」は1番で小野道風の柳に飛びつく蛙、2番では風が吹く中で巣を張った蜘蛛を讃え、ベトナムのフエの民族音楽「トンボ」は蜘蛛とその巣に捉えられたトンボの双方を風雨に負けず運命を共にしたと歌っている。以前紹介したルーセルの「蜘蛛の饗宴」も昆虫と蜘蛛の曲である。

ここからは毒蜘蛛の曲について。1995年に大阪で発見され話題になったセアカゴケグモは関東地方にまで分布を広げた。その「セアカゴケグモ」という曲がある。イギリスのパターソン（1947～）が作曲したハーブのための組曲「蜘蛛」の一曲で、全曲は「ダンシング・ホワイト・レディ」<クロゴケグモ>「タランチュラ」を加えた4曲で構成される。ハーブの弦を蜘蛛の巣に、忙しい指の動きを蜘蛛に見立てたジャズの影響を感じさせ

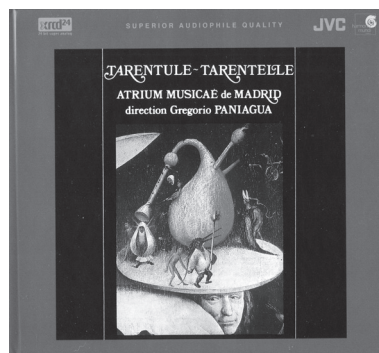
る曲である。シッチー（1956～）の吹奏楽「虫たち」の一曲が「クロゴケグモ」で、低音の金管楽器でクモの不気味さを表現している。北米原産のクロゴケグモはセアカゴケグモより強い毒性を持ち、セアカゴケグモとともに特定外来生物に指定されている。日本では2000年に米軍岩国基地周辺で見つかった。

有名な毒蜘蛛のタランチュラとよく似た名前の曲に「タランテラ」がある。テンポの速いイタリアの舞曲で、名前は南イタリアの町名タラントに由来するとの説と、タランチュラに咬まれたとき毒抜きのために踊る曲とする説とがある。実際にはその毒は死に至るほど強くないという。

ショパン、メンデルスゾーン、リスト、サラサーテ、ピアソラ等多くの作曲家が「タランテラ」を作った。ブルグミュラーの「25の練習曲」の「タランテラ」は女の子がピアノ発表会でよく弾く。曲名が「タランテラ」でなくてもメンデルスゾーンの「交響曲第4番イタリア」などそのリズムの曲もある。

「タランチュラの解毒剤」のアルバム名でたくさんの「タランテラ」で埋められたCDは面白い。

私にはコントラバス奏者の友人がいる。彼が蜘蛛の糸の弦で弾く「タランテラ」をいつの日か聴いてみたいものだ。



タランチュール＝タランテラ
販売元：(株) キングインターナショナル
制作・発売：日本ビクター（株）
JM-XR24202